論文（*Article*）

都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ ～イスタンブル（トルコ）における街頭映像の記録と分析～

Religious Representation and Community Identity in the City: Records and Analysis of Street Images in Istanbul, Turkey

山中 速人[1]・井藤 聖子[2]

Hayato Yamanaka and Kiyoko Ito

This research was conducted as a part of the 2012-2014 research project, “A Comparative Image Analysis of Visualized Religious and Ethnic Culture: Istanbul and Ikuno (Osaka)”. Three streets (Çarşamba, Ihlamurdere Cd, and Barbaros Blv) in Istanbul were selected for a comparative study of how religious symbols relating to Islam appear in the street environment.
The investigative methodology involved first selecting one segment of the street as a sample, and then walking along that segment while seamlessly recording the landscape in a video using a wide-angle lens. Next, clothing worn by all people appearing in the video was carefully observed and categorized into types of attire representative of Islam. The number and ratio of each type was then calculated.
Results showed that, in Çarşamba, 81.9% of women and 12.3% of men wore attire representative of Islam. In contrast, only a few women (11.2% in Ihlamurdere Cd and 5.4% in Barbaros Blv) and no men in the other two areas were found wearing such attire.
In Istanbul, the degree to which Islamic representations appear in the streets varies according to community as well as the gender of the wearer; such representations tended to appear more commonly in the community of Çarşamba and among the female gender.

キーワード：宗教的アイデンティティ、街頭映像、イスラム風俗、映像分析

Key Words ： Religious identity, Street image, Islamic lifestyle, Visual analysis

A. 研究の射程と対象

1. 研究の全体構成と本論文の位置

本論文は、「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析～大阪生野とイスタンブール」を構成する一部分として、発表されるものである。この「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析～大阪生野とイスタンブール」の研究は、2012～14年度に科学研究費補助金を得て、進められているものであり、2012

1　関西学院大学総合政策学部教授、社会学博士（関西学院大学）。本論では、A-1、B-1、B-2、B-5、C-1、C-3、Dを担当した。なお、論文全体をとおして山中が編集作業を担当した。

2　イスタンブル大学文学部シェイマ・ギュンギョル研究室研究調整員、文学博士（イスタンブル大学）。本論では、A-2、B-3、B-4、C-2を担当した。

年度に関しては、本学個人特別研究費の支援の下で並行して進められてきたものである。

この研究を始めるにあたっての問題意識は、次のようなものであった。それは、都市のアイデンティティにかかる文化的表象の可視化が急速に進行しているのではないかという問題意識である。

グローバルな市場経済の拡大に伴って、それと補完的関係にある多文化主義理念の浸透は、一部の先進諸国にとどまらず後発途上諸国をも巻き込みながら、トランス・ナショナルなレベルでの文化変容をもたらしつつある。そのような文化変容は、地域社会レベルにおいては、生活様式、衣装風俗、街頭景観などのミクロな局面において顕著に表出し、急速な展開を示しつつある。とりわけ大都市地域における、たとえば、宗教／エスニック・コミュニティにおいては、当該社会の支配的多数派とは異なる下位文化集団を形成する住民たちによる文化的アイデンティティの自覚化と自己表現が、活発に繰り広げられるようになっているように思われる。そして、そのような変容に共通する特徴は、シンボルや意匠などの表象文化の水準において変化が強く現れているということであり、言い換えれば、宗教／エスニック文化の可視性の拡大であると言えるのではないか。それは、当該の地域住民主体による自己表現であると同時に、社会経済的利益に裏打ちされた巧みな表現戦略であるかもしれない。

このような問題意識を背景として、本研究では、大阪・生野界隈（日本）のコリアン集住地域[3]とイスタンブル（Istanbul）・ファーティー（Fatih）界隈（トルコ）を対象として選び、一定の共通する手続きにしたがって映像で記録し、その映像を比較分析することによって、可視性を強める地域社会の宗教／エスニック文化の変化を通文化的な位相において明らかにすることを試みた。

開始された研究は2014年度まで継続される。ただ、研究過程で得られるデータは多義的で、多様な手法による分析が可能であり、また、そこから得られる知見は多岐に及ぶものであると予想される。そこで、研究をとおして得た知見とその研究成果を、今後、いくつかの論文に分けて、報告することにした。この論文では、イスタンブルにおける宗教的表象と地域のアイデンティティについて、考現学的な研究方法による接近の試みとその成果について、報告するものである。

2. 本論文の対象地域とその歴史的特徴：ファーティー地区とチャルシャンバ（Çarşamba）界隈

この調査で撮影の対象となった街路は、トルコ共和国の最大の都市であるイスタンブルのヨーロッパ側に属する旧市街中心部であるファーティー地区に属するチャルシャンバ界隈に含まれている。

まず、最初に、ファーティー地区について概観しておきたい。

ファーティー地区は、金角湾、ボスポラス海峡とマルマラ海に囲まれ、歴史的建造物が多数あるため、歴史的半島（城壁内）とトルコ語で呼ばれ、イスタンブルの中心と考えられてきた。その面積は15.62km^2、人口は2011年の推計で419,351となっている[4]。地図1は、イスタンブル全市内におけるファーティー地区の位置（および比較対象地域であるベシュクタシュの位置）を示したものである。

3　大阪・生野界隈は、歴史的に日本でも有数の、在日コリアンが集住してきた地域社会である。近年、日本におけるコリアン文化に対する関心の増大にともなって、この地域にはコリアタウンと呼ばれる商業地区の開発が住民と行政の協力によって行われた。また、コリアン文化を核にした観光地化が進められた結果、コリアン文化の可視化が急速に進展した。

4　Adrese Dayalı Nüfus Kayıt Sistemi（ADNKS）Veri Tabanı, Türkiye İstatistik Kurumu, 2011.

地図1 調査対象地区

歴史的にみれば、この地区の発展は、つぎのような過程を経て今日に至っている。

イスタンブルを征服した皇帝メフメト二世の命令により、イスタンブルの第4の丘に作られたファーティー・モスクを核として発展したファーティーは、オスマン帝国におけるトルコ人街としての性格を併せ持っていた。城壁に囲まれた「歴史的半島」としてのファーティーは、古代では、ローマ帝国の中核都市の一つであり、つぎに約1,000年にわたってビザンツ帝国の首都となり、メフメット二世による征服の後は、469年間、オスマン帝国の首都であった。そのため、今日、ローマ、ビザンツそしてオスマンという3つの時代に起源を持つ多様な様式をもつ遺跡を地区内に多数認めることができ、地区全体がまるで野外博物館のような景観を持つに至っている[5]。

オスマン帝国の時代になると、この城壁に囲まれた「歴史的半島」は、短期間でラテン侵略前の壮大な外観を回復した。ファーティフ・スルタン・メフメトは、征服後すぐに街の整備にとりかかり、荒廃したアヤソフィアをモスクに改修した。モスクやそれを中心とした教育機関とともにトプカプ宮殿の建設も始まり、現在のイスタンブル大学の原形となるイスラーム学院も建設された。また、ビザンツ時代からの水道橋も修復され、グランドバザールも建設された。並行して、住宅地域の開発も進み、アナトリアやルメリ(ヨーロッパ側)からムスリム人口が移住した。さらに、各地からキリスト教徒やユダヤ教徒も流入し、定住した。流入民が住む地域には、たとえばイェニシェヒールから来た人々はイェニカプ、コンヤのアクサライから来た人々はアクサライ、黒海地方のチャルシャンバからの人々はチャルシャンバと、出身地方やそれに関連した名前が付けられた[6]。出身地の名前をもつ地区は、今日でもファーティー内に数多く認めることができ、地区を性格づけるものとなっている。このような景観の特徴から、ファーティー地区は、「イスタンブルの原

5 Hürel, Haldun. *Anlat İstanbul*, Kapı Yayınları, 2009, pp.xiii-xx.
6 Lewis, Bernard. Istanbul and the Civilization if the Ottoman Empire. 1, University of Oklahoma Press, 1963.

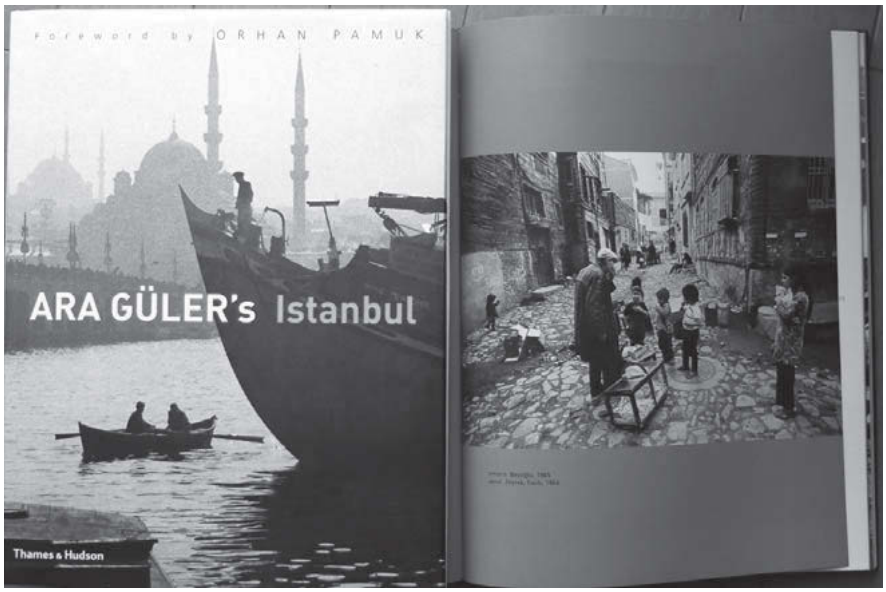


写真1 アラ・ギュレールの写真集に収録されたファーティー地区の写真

点」とか「真のイスタンブル」と今日呼ばれている。

20世紀に入り、アタチュルクによってイスタンブルの近代化が進行すると、ファーティーは、伝統的富裕階層はもとより、近代化を遂げつつある都市の新興中間階層が居住する地域としての性格をもった。これら富裕層の文化が醸し出していたコスモポリタンな街の名残は、今日でも、あちこちに見ることができる。しかし、その後、富裕層の多くがアナトリア側や市内の他地域に移ったため、今日では、ファーティーは主に地方出身者や低所得者層が住む地区に変った。これらの人々は、宗教的にはイスラームの慣習に忠実な人々としての性格を併せ持っていることに留意しておきたい。写真1は、1960年代中期に写真家アラ・ギュレール(Ara Güler)によって撮影されたファーティー地区の写真[7] である。

このファーティー地区の中でも、とくに、チャルシャンバ界隈は、髭を蓄え、長いコートとゆったりとしたズボンを身につけ、イスラーム風の帽子をかぶった男たちや、チャルシャフ(Çarşaf)に身を包んだ女性たちを数多く見ることができ、イスラーム的な雰囲気が街を覆っているような印象を与えている[8] 。先述したように、この地区に住む住民の多数は、政教分離と世俗主義に傾倒する比較的裕福な都市中間層とは異なり、多くは地方出身者であり、社会経済的地位は相対的に低く、世俗主義ではなくイスラームを生活規範とする傾向を有してきた。それはトルコ近代主義の文脈からは「保守的」で「時代遅れ」なものとして理解されてきたものである。しかし、今日、急速にイスラーム色を強めるトルコの政治状況の下で、これらの人々は、自己のムスリムとしてのアイデンティティを覚醒させ、自己表現としてムスリム的ライフスタイルや風俗を顕在化させようとしてい

7 Pamuk, Orhan(forward), *Ara Güler's İstanbul,* Thames & Hudson Ltd., 2009の表紙カバーおよび p.113を複写。このギュレールの写真集とそこに収録されたファーティー地区ゼイレック(Zeyrek)界隈の写真は、この地区に居住する人々の姿の当時の特徴をよく切り取っており、すぐれた歴史的史料としての価値を有している。

8 Yüzbaşıoğlu, Nil (ed.), İstanbul Hakkında Her Şey, Boyut Yayıncılık A. Ş., 2010, pp.120-125.

る。そのような変化は、地域社会の街頭景観や住民の衣装／風俗に顕著に表出されようとしており、ムスリム的生活文化の可視性は増大化の方向を強めているといってよい。

本論が観察の対象として選んだのは、このチャルシャンバ界隈の街路である。本論の目的は、この地区の街頭景観の記録映像をもとに、そこに表出された表象群、なかでも女性の「スカーフ」に着目し、その出現状況や頻度を分析することによって、イスラームの宗教的アイデンティティにかかわる表象とその可視化をめぐる変化の方向と特徴を記述するものである。その際、イスタンブルの他地区との比較も行い、今日のイスタンブルにおける宗教的表象が、都市内部の地域特性とどのように関係し、可視化されていくのかも、明らかにしてみたいと考えている。

本論の射程は、おおむね以上のようなものである。

B. 研究方法とその特徴：シームレスな記録映像と「考現学」的アプローチ

1. 映像の収録方法とその特徴：スタビライザーを使った連続撮影

まず、チャルシャンバ界隈の街路（直線にして約1キロメートル）のハイビジョンカメラによる撮影を行った。この界隈は、先述したように、イスタンブル旧市街にあって、経済発展が著しいイスタンブルに安価な労働力を供給している地方出身者が居住する賑わいのある街路である。この地区と比較対照するため、イスタンブル新市街の一般住宅地域からベシュクタシュ（Beşiktaş）地区に位置するウフラムルデレ街路（Ihlamurdere Cd.）とバルバロス大通り（Barbaros Blv.）の2つの街路を選び、同様に撮影を行った。

その記録の方法として、ビデオカメラをカメラスタビライザーに装着し、地域社会の街頭景観を切れ目なくシームレスに連続撮影するという特殊な撮影方法を採用した。この方法をもちいた映像記録は、1990年と2007～2010年に大阪・生野のコリアタウンの撮影において活用され、そこで撮影記録された映像は、分析可能なデータとして十分な有効性をもつことが確認されている[9]。

具体的な撮影方法は、以下のとおりである。まず、地図をもとに対象地域を選定し、その中の主要な街路を選び出す。つぎに、街路景観を広角レンズで歩行速度を守りながら上り下りの2方向を撮影する。音声は、環境音の収録を主眼とするが、一切編集を加えず、撮影者の声や機械の操作音もそのまま録音するものとする。したがって、映像には、地域住民、生活景観と生活音をふんだんに含んだ雑踏社会が記録されることになる。

カメラスタビライザーは、もともと走行中の戦車からの射撃技術から転用された振動吸収装置で、揺れがジャイロに吸い取られカメラがぶれない。よって、収録されたビデオ映像は、解像度の制約はあるものの、きわめて高い「網羅性」をもつこととなる。

このような撮影方法をとった意図は、以下のようなものである。つまり、移動カメラによる街頭景観の連続撮影という手法を用いて、何を記録し何を記録しないかという記録に際する基準の採用に際して、機械的、言い換えれば客観的基準を設定したのである。ここで採用される基準とは、繰り返しになるが、(1)対象とする地域社会の中心的街路を対象とし、(2)ビデオカメラにワイドレンズと防振ステディカムを装着して、(3)対象とする街頭景観を前向きの方向で連続撮影するというものである。

この基準を採用して撮影された街頭景観は、も

9　山中速人「コリアタウン（大阪市生野区）の映像記録の方法と実際：防振ステディカムを使用したフィールドワークの試み」『日本都市社会学会年報29』2011年9月、pp.25～ 37.

ちろん、地域社会の全体の映像による記録ではない。つまり、街路という公共空間から街並みの表層を捲り取るように撮影された映像であり、一つの地域社会が内包する私的領域としての家屋の内側を捉えてはいないし、また、朝、昼、夜という時間による変化や季節による変化も把握されていない。しかし、このように撮影記録された映像を使用することで、何を記録し何を記録しないかについての基準を客観化することが可能となる。

2. 分析方法とその特徴：「考現学」的分析アプローチとその今日的応用

今和次郎が1925年5月の4日間に東京・銀座で行った風俗記録調査は、今日でも、都市の文化景観の記録の方法として、きわめて重要な知見と示唆に満ちている。この東京銀座風俗記録は、今和次郎と吉田謙吉が日本で初めて組織的に行った、街頭風俗を記録する調査活動であった。関東大震災後の風俗の変化を、その変化がもっとも著しく顕在化するだろう銀座を対象地に選び、記録を試みたのである。

今らが採用した方法は、1925年5月の4日間、京橋から新橋までの約1キロメートルの街路の歩道（西側）を時速3キロメートル程度の速さで歩きながら、出会った人々を対象に、時刻による人出の密度、出会った人々の年齢、職業、性別、服装、持ち物など、100項目以上に及んで詳細に記述するものであった。

今らの風俗調査に対する今日的評価はさまざまであるが、その肯定的評価の核心が、今らが採用した調査法のもつ網羅性であることは言を待たない[10]。今らは、この方法による街頭風俗の調査の有効性を確信し、調査に際して採用した方法論を「考現学」[11] と命名し、銀座での調査の後、本所深川や東京郊外に調査対象を拡大していった。今日、その成果は、『東京銀座風俗記録』や『本所深川貧民窟附近風俗採集』として公開され、たんに風俗研究の分野だけでなく、さまざまな領域で時代を物語る、物言わぬ証言として活用されている。

今日においても、今らの方法論から多くの示唆を得ることができるだろう。もちろん、今らの調査法をそのまま継承すること自体に大きな意義があるし、実際、その実践も行われている[12]。と同時に、今らの方法論からその基本的な概念を踏襲しつつ、今日の調査技術、記録技術を動員することによって、より効果的な調査が可能となるだろう。

イスタンブル調査では、現地に大量の調査記録者を動員することなく、調査対象地域を映像によって撮影記録し、その映像記録を読み取ることによって、今が「考現学」において試みようとした文化変化の共時的記録を、より効果的に行うことを試みたのである。

この映像による撮影記録が、今らが1925年という時点で採用した方法とくらべて、「考現学」の調査思想という観点に限定しても、より効果的である点は、次のような点である。

まず、第1に、映像による記録のもつ保存性である。現地での肉眼による観察は、観察対象をたとえ「網羅的」に記録するといえども、対象を要素に還元し、分類する過程を不可避的に伴う。この過程で、記録に際して、観察者の内的基準や分類基準の恣意性が介入せざるを得ない。たとえば、下駄と洋靴は、判別が容易だとしても、前掛けとエプロンの判別は、かなり難しいだろう。街頭を

10 今和次郎に対する今日的評価を代表する論評として、萩原正三、石黒いずみ他編『今和次郎採集講義』青幻舎2011年p.118では、今らの方法について「この調査の重要な成果は、道行く人々の行動を網羅的に記録すること」であったと指摘されている。

11 今和次郎『考現学入門』ちくま文庫、1987年。

12 今の調査対象地区と方法論を踏襲して、酒井道夫と武蔵野美術大学短期大学部生活デザイン科の学生らによって、1980年と1996年に追調査が行われている。http：//homepage2.nifty.com/seide/ginza/GMain.htm

ゆく人々の洋風化の程度を示す指標として、下駄と洋靴を取り上げるなら、問題はないかもしれないが、カフェの女給の服装の洋風化の程度を前掛けとエプロンで捉えるとするなら、調査の信頼性はきわめて不安定なものとならざるを得ないだろう。

このような問題を克服する上で、映像による記録はきわめて有効である。というのは、まず、映像それ自体がきわめて高い具象性をもつからである。映像を使うことによって、観察対象を、それが読み取られる(分類される)前段階のただの「物」として「網羅的」に記録することができる[13]。つぎに、記録された映像は、複数の分析者によって読み取られる(分類される)ことで、より高い判別の精度を確保することが可能となるからである。と同時に、その判別の基準の揺れを明示化することで、対象とする風俗要素の多義性やバリエーションを示すことも可能となるだろう。

第2に、調査に際して、対象となる地域や人々に対して、調査が与える影響についてである。大量の観察者が群れをなして調査対象地をフィールドワークするという出来事は、現地を生活の場とする人々の日常に対する著しい侵入となりうる。今が、その点に関して、もともと盛り場としての非日常性と匿名性を特徴とする銀座を最初の調査地として選んだのは、懸命であったといえるだろう。しかし、今回のイスタンブル調査が対象としているような、地縁的結合が強く、高い記名性をもつ地域社会の調査では、少数あるいは単独の撮影者、それも現地社会から選ばれた撮影者が小型カメラによって撮影するという手法が、調査対象の日常性を撹乱しないという意味において、きわめて効果的なのである。

さて、実際に今回の調査で撮影された映像に対して、どのような分析を行ったかを手順にしたがって次に述べる。

まず、最初に、対象とする3つの街路の映像を視聴しながら、そこに登場する人々について、どのようなイスラームに関連する服装をしているか視認によって選別していった。

女性については、対象地域で出会う人々の被り物(いわゆるスカーフ)に注目した。その際、あらかじめ参照基準として用意している3つの分類、チャルシャフ(Çarşaf)、バシュオルトゥス(Baş örtüsü)、トゥルバン(Türban)、を用いて分類を行った。女児についても、同様である。

次に、男性については、髭を長く伸ばし、膝下まで包み込むようなゆるやかなジュッペ(Cübbe)と呼ばれる長衣に、タッケ(Takke)あるいはサルク(Sarık)と呼ばれるつばのない帽子を身にまとうのが、男性ムスリムの慣習的服装であるといわれているので、この服装を着用しているかどうかを視認して分類していった。男児についても、同様である。

3. 「スカーフ」問題の位相

ところで、本研究でなぜ「スカーフ」が対象として選ばれたかについては、以下の様な背景がある。

ムスリムの被り物、いわゆる「スカーフ」をめぐる議論が、9.11以後、欧米社会を中心として沸騰している。「スカーフ」をムスリムの宗教的アイデンティティを象徴する表象とみなし、それに対して、多数派であるキリスト教徒の文化からの違和感や敵意を表出するという、アメリカにみられるような傾向がある。また、同様に、「スカーフ」をイスラームの宗教的な象徴とみなし、それが国家の政教分離原則に反するものとして排除しようとするフランスにみられるような傾向も存在している。両者に共通するのは、ともに「スカーフ」をム

13 考現学の方法では、網羅的な記録性を確保するために、今らは100項目以上の記録項目を設定せざるを得なかった。しかし、本調査では、記録された映像を使うことで網羅性はすでに担保されているため、分析対象を「被り物」に焦点化させることができたのである。

スリムの宗教的アイデンティティ表象とみなすという立場である。そのような欧米社会からの反発や違和感の表明に連鎖する形で、ムスリム社会の側からも、「スカーフ」着用をめぐって、さまざまな反応や態度表明が行われるようになっている。

この「スカーフ」問題については、内藤正典、阪口正二郎編『神の法vs.人の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』（日本評論社）が、西欧社会としてフランス、ドイツ、ベルギー、そしてムスリム社会についてはトルコを取り上げ、それぞれの社会の状況を丁寧に検討し、現状を分析している。そこでの内藤の議論を借りて言えば、この「スカーフ」をめぐる問題の「焦点は、これらの着衣をイスラームという宗教の表象と認識するか否かにある」[14] といえる。

内藤の指摘によれば、西欧社会の側が共通して、「スカーフ」をイスラームの宗教的表象としてみなす傾向を示すのに対し、イスラム教徒が社会の圧倒的な多数派を形成しているムスリム社会では、かならずしも「スカーフ」それ自体がイスラームの宗教的アイデンティティの積極的表現として位置づけられているわけではない。むしろ、「スカーフ」はイスラームの教義に根拠をもった慣習的な着衣として、人々の日常性の中に受容されてきた側面が大きい。同書でトルコの「スカーフ」着用問題について論じた大曲祐子の言葉を借りれば、「スカーフ着用は個人の選択によるものであり、トルコ社会において、スカーフ着用の意味は、多義的」[15] である。このような状況の中で、「スカーフ」に強い宗教的アイデンティティを認める態度や姿勢がムスリム社会において確認されるようになったのは、むしろ西欧の反イスラーム感情に対する反発や国内におけるイスラーム主義的政党の勢力拡大が見られるようになって以降の傾向であるように思われる。このような文脈において初めて、「スカーフ」はムスリムとしてのアイデンティティと深く結合した表象としての意味を獲得することとなる。

他方、それとは別に、アタチュルクによる近代トルコ国家においては、「スカーフ」は、世俗主義原則にもとづく社会的規制の対象として、公的領域から排除されるものとして取り扱われてきた。トルコにおける政教分離原則は、トルコではライクリッキと呼ばれる。この政教分離原則では、私的領域においては、イスラーム的慣習に則った女性の「スカーフ」や長衣の着用、また男性のフェズ[16]の着用も原則的に自由であるが、公的領域や公共の場面においては禁止されてきた。

しかし、世界的にイスラームへの回帰傾向が拡大する中で、とりわけ女性の「スカーフ」着用への指向は、慣習的に「スカーフ」を着用してきた一般庶民感情を背景としながら、拡大を示すようになった。たとえば、公的領域としてかつては「スカーフ」の着用が禁止されてきた大学での「スカーフ」着用が認められるなど、「スカーフ」の着用をめぐる動向は流動化している。

4. 「スカーフ」の分類とそれぞれの特徴

ところで、これまで「スカーフ」と便宜的に述べてきたが、実際には、女性の被り物としてみれば、その形態はきわめて多様であると同時に、それが文化や宗教的アイデンティティとして内包する意味づけも多様である。

ここでは、現在のトルコで一般的に女性の被り物を指す、チャルシャフ（Çarşaf）、バシュオルトゥス（Baş örtüsü）、トゥルバン（Türban）という3つのことばを取り上げ、その形態や意味付けを検討してみよう。

14　内藤正典、阪口正二郎編『神の法vs.人の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007年、p.3

15　大曲祐子「ムスリム国トルコのスカーフ問題」内藤正典、阪口正二郎編『神の法vs.人の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007年、p.238

16　オスマン帝国時代に男性が着用した帽子、いわゆるトルコ帽

まず、この3つのことばをトルコでもっともよく使われている辞書のひとつであるTürkçe Sözlük1,2[17] では、どのように記されているかみてみる。同辞書によれば、

1) バシュオルトゥスは、「女性の髪の毛を覆うために使われている覆い」[18] と記されている。
2) つぎに、トゥルバンは、「頭を強く締め付けるために薄い布で作られたバシュオルトゥスの一種」[19] と記され、
3) また、チャルシャフは、「昔女性が使っていた、頭からかぶり、肩から下方に垂れている広くて袖のない、外出用の上着とスカート」[20] となっている。

この定義をみる限りでは、3つのことばは、「被り物」の形態的な特徴を示すものに過ぎない。（本論で映像を読み解く際に用いることになる判別基準は、この形態による定義にもとづいている。）

ところで、この3つのことばは、2003年にトルコにおける女性の被り物についての実態／意識調査を行ったミリエット紙が調査の際にも使用されたものである[21] 。それによると、3つのことばには次のような説明がなされている。

1) チャルシャフ：女性の頭部からつま先までを覆い隠すための外套様の衣服を指すことば。身体の線をあらわにしないデザインを特徴としている。
2) バシュオルトゥス：頭部と頭髪を覆い隠す布／衣服を広く意味することば。
3) トゥルバン：バシュオルトゥスに分類される衣服の中でも、とくに都市部に住む教育をうけた若い女性が自己主張をもって、あるいはファッションとしての意識をもって着用する衣服を指すことば。

この定義をみれば、バシュオルトゥスとトゥルバンについては、たんに形態的な差異だけではなく、今日の文化的文脈においては、個人の宗教的アイデンティティ、さらに政治的なアイデンティティや価値観とも結びついた差異が存在していることが示されている。

また、トルコのジャーナリズムにおいては、さらに多義的な意味付けを示唆する見解[22] すらある。それによると、バシュオルトゥスには、「農村的」「没個性的」「非政治的」「低学歴」「慣習性」などの意味が込められ、さらに形態的にも「ルーズで頭部が見え隠れする」ものという意味が含まれている。他方、トゥルバンには、「都市的」「個性的」「政治的」「高学歴」「ファッション性」などの意味が込められ、また形態的にも「きっちりと固定されていて頭部が完全に隠れている」ものという意味が含まれている。

本研究では、この3つの被り物がイスタンブルの異なった地域の街頭景観の中においてどのように出現するか、共時的に観察、比較した。

この作業をとおして、もし被り物が今日的意味で、人々の宗教的アイデンティティの表象という意味をもっているとするなら、その出現の程度や頻度で、その地区の宗教的アイデンティティの位相の一端を明らかにすることができるはずである。

17 Parlatır, İsmail(Haz), *Türkçe Sözlük1,2,* 9. Baskı, Türk Tarih Kurumu Basım Evi, Ankara, 1998.この辞書は、トルコでは中等教育段階で広く用いられ、最も普及した辞書の1つである。

18 Başörtü：Kadınların saçlarını örtmek için kullandıkları örtü.

19 Türban：İnce kumaştan yapılmuş, başı sıkıca kavrayan bir tür baş örtüsü.

20 Çarşaf：Eskiden Kadınların kullandığı ve baştan örtülen, pelerinli, eteklikli sokak giyisi.

21 http://www.milliyet.com.tr/2003/05/27/guncel/agun.html

22 Ahmet Hakan, Türban ile baş örtüsü arasındaki 12 fark, *Hürriyet*, Dec.5, 2007, http://hurarsiv.hurriyet.com.tr/goster/haber.aspx?id=7812976&yazarid=131

5. 分析の手順

つぎの段階の作業として、撮影された3つの街路の映像をハイビジョンモニターで上映し、用意された複数の読み手が、映像を視聴しながら、計数機を手に持ちながら、項目ごとにその数を計測していった。

計数の対象となった項目は以下のとおりである。

1) 映像に現れた、判別可能なすべての人数(撮影はハイビジョンカメラで行われたが、その解像度の限界を超え、以下の2～5の判別が不可能なものは除外した。)
2) 男女別の人数
3) 児童の人数(目視による判別にもとづき、初等教育レベルの児童とした。)
4) 女性について、被り物の種類別(チャルシャフ、バシュオルトゥス、トゥルバン、被り物なし)の人数
5) 男性について、イスラームの様式に従ったジュッペ(Cübbe)と呼ばれる長衣やタッケ(Takke)と呼ばれるつばなし帽(あるいはその両方)を着用している人数

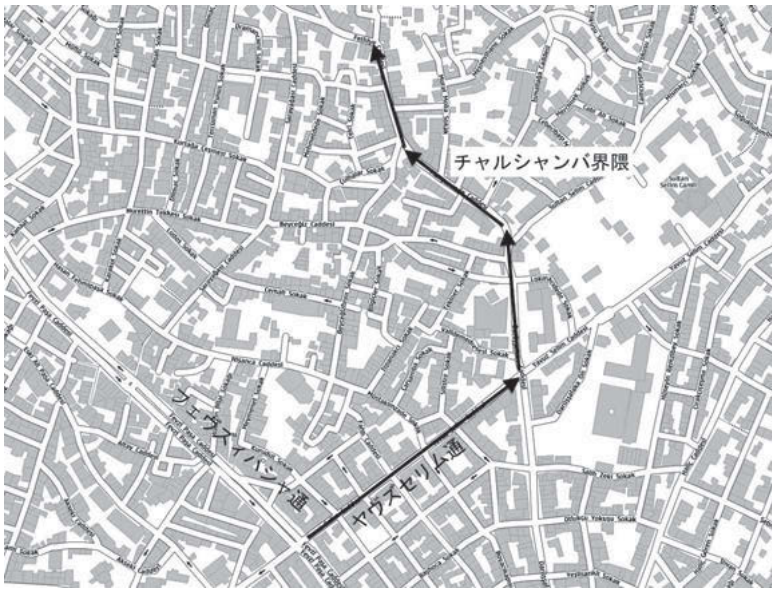
以上の5項目について、計数機をもちいて計測し、街路ごとにその累計を算出した[23]。

C. 調査報告

1. 撮影の実施過程

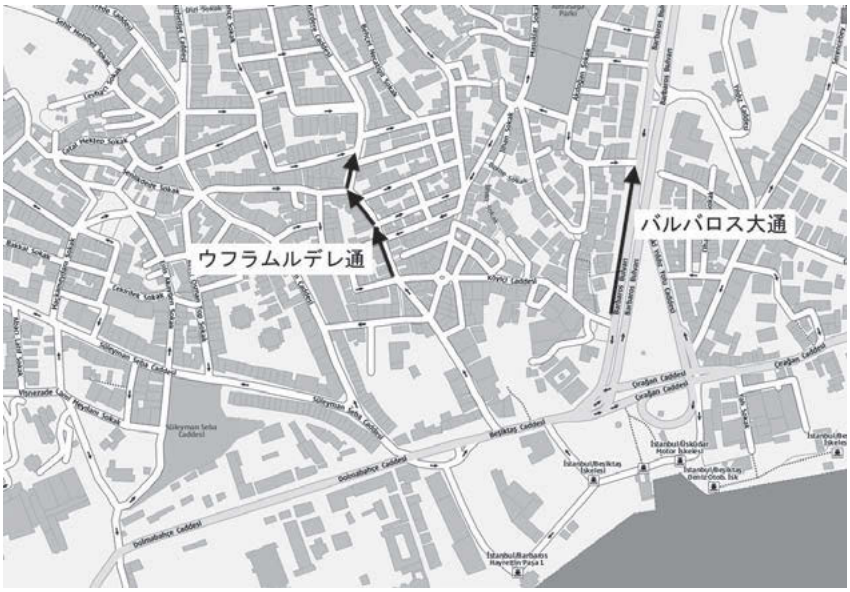
さて、ファーティー地区の撮影は、2012年5月18日と9月1日に実施された。撮影の対象となったチャルシャンバ界隈の街路は、地図2のとおりである。

また、この地区と比較対照するために選んだ、イスタンブル新市街の一般住宅地域からベシュクタシュ(Beşiktaş)地区に位置するウフラムルデレ街路(Ihlamurdere Cd.)とバルバロス大通り



地図2 チャルシャンバ界隈での撮影順路

23 ところで、この過程では、その3つの類型と定義がどの程度、実際の被り物を分類する上で有効であるかについての確認も同時に行った。というのは、映像の中に現れた被り物の中には、定義に即して判断することが容易に行えるものもあるが、定義を超えるものや両義的なものもけっして少なくないからである。そのような類型から逸脱する事例を確認し、また、質的データとして収集することで、現実の被り物がもつ予想を超えた意味の広がりを明らかにしようとしたのである。ただ、この調査結果については、現在、2013年度の課題として研究継続中であり、結果の報告は、別の機会に行いたい。



地図3 ベシュクタシュ地区での撮影順路

(Barbaros Blv.)の撮影をウフラムルデレ街路については2012年5月18日と8月31日、バルバロス大通りについては2012年5月17日と8月30日に実施した。この比較対象として選ばれたウフラムルデレ街路とバルバロス大通りの位置は、地図3のとおりである。

a. ファーティー地区チャルシャンバ界隈の撮影

まず、カメラは、フェヴズィパシャ通り(Fevzi Paşa Cd.)からヤヴズセリム通り(Yavuz Selim Cd.)との交差点を北東の方向に入り、だらだら坂を登っていく。道は、両側に階段上の歩道がついており、その進行方向にむかって右側の歩道を進んでいく。そして、坂を登り切った辺りで、ダルシュシャファカ通り(Darüşşafaka Cd.)と交わる。その交差点を渡り、ヤヴズセリム通りの左側の歩道から交差点を左折し、ダルシュシャファカ通りへと進入していく。左側には、ヤヴズセリム小学校(Yavuz Selim İöo)の校舎がみえ、通りを挟んだ向かい側には、ファーティー女学校(Fatih Kız Lisesi)の校舎もみえる。街路の左側の幅員の大きい歩道には、露店が並んでいる。その前を通りながら、さらに、道に沿って北上していく。道はこの辺りで呼び名が変わり、マンヤシザデ通り(Manyasizade Cd.)となる。歩道は狭隘になり、道の両側には商店が軒を連ねる。2ブロックほど歩くと、さらに道はさらに呼び名を変え、ファーティエ通り(Fathiye Cd.)となる。この辺りで、歩行路を反対側の右側に移し、さらに北上すると、道はすこし下り坂になってくる。道の両側には、かわらず中小の商店が連なっている。右手にギョク(Gök)という名の横丁がみえるが、その横丁の前を通り過ぎると、右手にファーティエ寺院へとつづく横丁が現れてくる。ここから道は左にカーブし、さらに下り坂になっていき、ふたたびフェヴズィパシャ通りへと戻っていくのである。撮影は、ここで反転し、今まで歩いてきた道を逆に辿っていくのである。写真2は、このチャルシャンバ界隈の一角を、撮影した映像から切り出したものである。

本論では、現地収録を行った2つの時期のうち、夏(2012年9月1日)に収録された映像について、分

析を進めた。撮影が実施された9月1日は土曜日であったが、チャルシャンバの街頭は、とくに週末に人出があるというわけではなく、平日に訪れた時とあまり変わりない雰囲気に包まれていた。当日の気温は摂氏27度前後で、盛夏は過ぎたものの、まだまだ夏の名残がみられた。

今回、この夏の時期に撮影を行った理由の1つは、暑さのために薄着をするこの時期、肌を覆う特徴をもつチャルシャフやバシュオルトゥス、トゥルバンと、それらを着用しない世俗的な夏の服装との差が明確に視認できるのではないかと期待していたからである。

イスタンブルの夏は、日本と比べて乾燥している。しかし、トルコの内陸部と比べれば、湿度が高いこともあり、この時期、蒸し暑い日もすくなくない。ただ、この日は晴天で、空気もかなり乾燥していた。だから、日差しの中は、まだまだ暑気があるが、日陰に入ると涼しく、心地良かった。撮影時刻は、正午をすこし回った時間帯であったが、人々は、とくに日中の外出を避けるというほどではなく、通りは、買い物客や散策を楽しむ人々や腰掛けて談笑を楽しむ人々で賑わっていた。

カメラを持って街頭を撮影していったが、街頭に繰り出した人々の中で、カメラを意識して、フレームへの写り込みを避けたり、反対に、撮影者に声をかけたりする者はほとんどいなかった。歩道ですれ違う時、たまにカメラに一瞥を与える人がいる程度であった。

b. ベシュクタシュ地区ウフラムルデレ街路／バルバロス大通りの撮影

ウフラムルデレ街路とバルバロス大通りが属するベシュクタシュ地区は、イスタンブル新市街ヨーロッパ側にあってボスポラス海峡に面し、アジア側に渡るための連絡船の船着場を中心に発達した商業地と、その背後に広がる住宅街からなる地域である。バルバロス大通りは、ベシュクタシュ地区を北の住宅地域から南のボスボラス海峡に面した船着場まで南北に貫き、その両側に公共施設やオフィスが並ぶ大通りである。また、ウフラムルデレ街路は、その商業地の一角に位置し、中小の商店が軒を連ね、街路の両側に街路樹をいただいた商店街である。

写真2 チャルシャンバ界隈

写真3 ウフラムルデレ街路

ウフラムルデレ街路の撮影は、チェレビオール(Çelebi Oğlu Sk.)小路からイェニヨル小路(Yeniyol Sk.)との交差点まで街路の左側の歩道を北方向に撮影した。写真3は、このウフラムルデレ街路の一角を、撮影した映像から切り出したものである。また、バルバロス大通りの撮影は、大通りを南から北へ、進行方向に向かって左側の歩道をハスフルン通り(Hasfırınn Cd.)との交差点を過ぎた地点からアクマズチェシメ小路(Akmaz Çeşme Sk.)との交差点まで撮影を行った。

写真4は、このバルバロス大通りの一角を、撮影した映像から切り出したものである。

写真4 バルバロス大通り

写真 PH000

2. 映像に記録された「被り物」の具体的事例と分類

まず、収録されたハイビジョン動画から、女性の被り物の具体的事例を静止画として切り出した。これらの被り物をとりあえずチャルシャフ、バシュオルトゥス、トゥルバンという類型に応じて分類、整理してみた。

ところで、この3つの被り物の事例を示すに先立って、被り物をしていない、いわば「世俗」的な服装の男女の事例の写真(PH000)を冒頭に示しておく[24]。このような服装がイスタンブルの他地域では、一般的だからである。

a. チャルシャフ

チャルシャフについては、共通の要素が多く、比較的判別が容易であった。写真(PH001)の3人の女性のうち、左側(前)と右側(後)の2人の女性が着用している被り物が、チャルシャフである。概ね黒衣で全身を緩やかに覆うこの衣服は、チャルシャンバ地区の街頭風景を特徴付ける要素の1つとして、イスタンブルの人々にとっても、強い印象を与えているようである。

写真 PH001

24 なお、論文に掲載した写真に関しては、プライバシーの保護に留意するため、個人の顔が識別されないよう、必要に応じて、フォトレタッチングによってぼかし処理をほどこしている。

写真 PH002

写真 PH003

b. バシュオルトゥス

トルコ語のバシュオルトゥス(Baş örtüsü)という語には、本来、たんに頭を覆う物といった意味しかない。Başは「頭」、örtüは「覆い」という意味で、この2語が対となって、女性の被り物をさすBaş örtüsüという名詞になっているのである。しかし、実際にトルコで使用されている用例としてみた場合、バシュオルトゥスは、女性が家事や労働に従事する時、女性の頭髪をまとめ覆うための布として理解されていることが多い。この用法は、たとえば、日本人が調理を行うときに頭部に着用する三角巾や若い人たちが軽作業時に頭部の保護に使用するバンダナを想像すると、わかりやすい。そこで、まず、この形態的性格にのみ留意して、バシュオルトゥスと見なされる事例をいくつか取り出してみよう。

写真(PH002)は、初老の女性が、ゆったり目の長袖の上着とくるぶしまでのスカートを着用した上に、茶色系のバシュオルトゥスを被った姿である。バシュオルトゥスは首下で一度ねじられ、前開きの上着の胸元に差し込まれて簡単に固定されている。このように、ゆったり目の長袖の上着と長いスカートにバシュオルトゥスをあわせる着方は、よくみられるものであった。

写真(PH003)では、ボタンのない長袖のTシャツ様の上着にバシュオルトゥスを合わせている。

写真 PH004

ここでは、バシュオルトゥスは、首の下で軽く結ばれ、固定されている。

バシュオルトゥスとロングコートとの組み合わせも多かった。写真(PH004)の女性は、長い紺色のコートに、青い地に鮮やかなピンクの縁取りのあるバシュオルトゥスを被っている。バシュオルトゥスから女性の前髪の一部が覗いているのも、バシュオルトゥスの着用法としてよく見られるものである。

c. トゥルバン

トゥルバンの形態的定義によれば、「頭を強く締め付けるための布」が判別の決め手となるはずである。この点に留意してみると、次のような事例がトゥルバンとみなしうるだろう。

写真(PH005)の右側の若い女性の被り物は、トゥルバンの定義上の要件をはっきりと満たす事例である。白い大きなバッグを左腕の抱えたこの女性は、ゆったりとした黒い衣服をまとい、頭には、山吹色のスカーフ様の布を巻きつけている。ここで注目するのは、その山吹色の被り物の下から頭髪にしっかりと巻きつけてある黒い布の存在である。この布がトゥルバンの特徴を示すもので

写真 PH005

写真 PH006

ある。この布というのは、ぴったりとした帽子状のものであったり、薄布をきっちりと巻きつけるようなものであったりといろいろであるが、多くはその巻布の上に、さらにスカーフ様の布をかぶることが多い。ただ、そのような内側の巻布がない場合でも、スカーフ様の布を強くきっちりと頭部に巻きつけているような場合はトゥルバンと呼ぶこともある。いずれにせよ、きつく頭部に巻きつけることがトゥルバンの条件となっているようである。

この観点に留意すれば、トゥルバンに分類される被り物を被った女性には、次のような事例を挙げることができるだろう。

写真(PH006)は、母とその娘(あるいは嫁)と思われる二人連れである。年長の女性は、黒い長衣に白いトゥルバンを被っている。その傍らにいる若い女性は、白っぽいコートに白いトゥルバンを合わせている。体を包む衣服は異なっているが、ともにトゥルバンを頭に被っているところは一緒である。スカーフ様の被り物の下から覗く女性たちの額に薄っすらとトゥルバン特有の巻布が見えている。

d. 男性や子どもの服装

女性の被り物に注目してきたが、チャルシャンバ界隈では、男性や子どもについても、イスラーム特有の衣服の着用を観察できた。

先述したように、髭を長く伸ばし、膝下まで包み込むようなゆるやかなジュッペ(Cübbe)と呼ばれる長衣に、タッケ(Takke)あるいはサルク(Sarık)と呼ばれるつばのない帽子を身にまとうのが、男性ムスリムの慣習的服装であるといわれている。チャルシャンバでは、写真(PH007)や写真(PH008)のような服装の男性が観察できた[25]。

ただ、長衣と帽子の両方を着用している事例は、すくなかった。多くは、写真(PH009)や写真(PH010)、写真(PH011)のように、帽子の着用だけのとどまる事例の方が多かった。

25 この写真(PH007)の帽子がサルク(Sarık)であり、写真(PH009)の帽子がタッケ(Takke)である。

写真 PH007

写真 PH008

写真 PH009

写真 PH010

写真 PH011

これらの帽子を被った男性は、多くは高齢の男性であったが、なかには、写真(PH012)のように若い男性の事例も見受けられた。

また、子どもについては、先述したように、女児の場合は、チャルシャフを着た女性たちに連れられ、バシュオルトゥスやトゥルバンを着用した姿がみられた。男児については、写真(PH013)のように、帽子と衣服の両方を借用した事例が、一例だけみられた。ただ、子どもについては、チャルシャンバでもベシュクタシュでも、ほとんどの子どもが、イスラーム的特徴を示さない「世俗的」な服装を着用していた。

写真(PH014)は、Tシャツと綿のズボン、スニーカーという服装に身を包んだチャルシャンバ界隈を歩く子どもたちの集団である。

3.「被り物」をまとう人々の数量的状況(チャルシャンバとベシュクタシュの比較)

本節では、対象地区の街路を行き交う人々の服装について、数量的な観点から分析してみることにしたい。

調査対象のチャルシャンバ界隈で夏に撮影された映像に現われた人々の姿をもとに、視認によって分類を行った。また、それと比較するために、ベシュクタシュの2街路(ウフラムルデレ街路／バルバロス大通り)で撮影された映像をもとに、同

写真 PH012

写真 PH013

写真 PH014

様の分類を行った。その結果を表1～4にまとめた。

a. 映像に記録された人々の人数と基本的属性について

表1は、撮影を行った3つの街路で、映像に記録された人々の基本属性を示したものである。

チャルシャンバの街路の映像で視認できた人々の総数は283人であった。うち女性は120人(45.9％)、男性は153人(54.1％)であった。また、子どもは44人(15.5％)で、うち女児は22人(7.8％)、男児は22人(7.8％)であった。

ベシュクタシュ地区で撮影した2つの街路のうち、ウフラムルデレ街路の映像で視認できた人々の総数は178人であった。うち女性は86人(48.3％)で、男性が92人(51.7％)であった。また、子どもは9人(5.1％)で、うち女児は5人(2.8％)、男児は4人(2.3％)であった。

また、ベシュクタシュ地区バルバロス街路で視認できた人々の総数は94人であった。うち女性は38人(40.4％)、男性は56人(59.6％)であった。また、子どもは3人(3.2％)で、うち女児は1人(1.1％)、男児2人(2.2％)であった。

チャルシャンバ界隈は、ベシュクタシュ地区と比べて、男性の比率が女性に対してやや大きく、また、子どもの比率も大きいことがわかる。

単位=人 (％)	女性		男性	
	おとな	こども	おとな	こども
チャルシャンバ街路	98(35.9)	22(7.8)	131(46.4)	22(7.8)
ウフラムルデレ街路	81(45.5)	5(2.8)	88(49.4)	4(2.3)
バルバロス大通り	37(39.4)	1(1.1)	54(57.4)	2(2.1)

表1 映像に記録された人々の属性

b. 女性の被り物の着用について

表2は、撮影した3つの街路の映像で視認できたおとなの女性について、その被り物の有無と種類(チャルシャフ、トゥルバン、バシュオルトゥス、無着用)の別に応じて、人数を示したものである。

チャルシャンバ街路では、おとなの女性98人のうち、チャルシャフを着た女性が26人(26.5％)で、トゥルバンを着た女性が42人(42.9％)、バシュオルトゥスを着た女性が12人(12.2％)であった。これら3種類の被り物を着た女性を合計すると80人(81.6％)である。他方、被り物を着けていない女性の人数は、18人(18.4％)であった。

ベシュクタシュ地区のウフラムルデレ街路では、おとなの女性81人のうち、チャルシャフを着た女性は0人(0％)で、トゥルバンを着た女性は2人(2.5％)、バシュオルトゥスを着た女性は7人(8.6％)であった。これら3種類の被り物を着けた女性を合計すると9人(11.1％)である。他方、被り物を着けていない女性の数は、72人(88.9％)であった。

ベシュクタシュ地区のバルバロス大通りでは、おとなの女性37人のうち、チャルシャフを着た女性は0人(0％)で、トゥルバンを着た女性は0人(0％)、バシュオルトゥスを着た女性は2人(5.4％)であった。これら3種類の被り物を着けた女性を合計すると2人(5.4％)である。他方、被り物を着けていない女性の数は、35人(94.6％)であった。これに対し、被り物を着けていない女性は18人(18.4％)であった。

単位=人 (％)	女性(おとな)の被り物			
	チャルシャフ	トゥルバン	バシュオルトゥス	被り物なし
チャルシャンバ街路	26(26.5)	42(42.9)	12(12.2)	18(18.4)
ウフラムルデレ街路	0(0)	2(2.5)	7(8.6)	72(88.9)
バルバロス大通り	0(0)	0(0)	2(5.4)	35(94.6)

表2 女性(おとな)の被り物別人数

c. 男性の長衣と帽子の着用について

表3は、おとなの男性がイスラームを印象づける長衣と帽子(あるいは帽子のみ)を着用しているかどうかを計数した結果である。

チャルシャンバ界隈では、映像で視認できたおとなの男性のうち、3人(2.1％)が長衣と帽子の両

方を着用し、15人(11.4%)が帽子のみを着用していた。これに対し、113人(86.3%)が両方ともに着用していなかった。

ベシュクタシュ地区で撮影した2つの街路では、ともに、映像で視認できたすべてのおとなの男性が、長衣と帽子ともに着用していなかった。

単位=人(%)	男性(おとな)の服装		
	長衣+帽子	帽子のみ	それ以外
チャルシャンバ街路	4(3.1)	12(9.2)	115(87.7)
ウフラムルデレ街路	0(0)	0(0)	88(100)
バルバロス大通り	0(0)	0(0)	54(100)

表3 男性(おとな)の服装別人数

d. 子どもの服装(女児の被り物、男児の長衣/帽子)の着用について

表4は、それぞれの街路で、映像で視認できた子どものうち、イスラームを印象づける衣服として、女児は被り物、男児は長衣/帽子(あるいは帽子のみ)を着用していた子どもの数を街路別に示したものである。

これをみれば簡単に分かるように、チャルシャンバ街路では、映像で視認できた22人の女児のうち、被り物を着用していた女児は、5人(22.7%)、被り物を着用していない女児は17人(77.3%)であった。つぎに、同街路で視認できた22人の男児のうち、長衣/帽子(あるいは帽子のみ)を着用していた男児は4人(18.2%)、着用していなかった男児は18人(81.8%)であった。

ベシュクタシュ地区では、ウフラムルデレ街路とバルバロス大通りの両方について、被り物を着用していた女児、長衣/帽子を着用していた男児は、ともにまったく視認できなかった。

単位=人(%)	こどもの服装					
	女児			男児		
	被り物あり	被り物なし	女児の合計	長衣/帽子	ともになし	男児の合計
チャルシャンバ街路	5(22.7)	17(77.3)	22(100)	4(18.2)	18(81.8)	22(199)
ウフラムルデレ街路	0(0)	5(100)	5(100)	0(0)	4(100)	4(100)
バルバロス大通り	0(0)	1(100)	1(100)	0(0)	2(100)	2(100)

表4 こどもの服装別人数

D. 考察と残された課題

1. 考察

数量的視点から結果を考察してみたい。はっきりと言えるのは、チャルシャンバ界隈は、ベシュクタシュ地区と比較して、イスラームを印象づける被り物を身につけた女性の数は、圧倒的であることだ。とくに、身体全体を黒衣で包み込むチャルシャフを着た女性が視認できたのは、このチャルシャンバ界隈だけで、ベシュクタシュ地区ではまったく視認できなかった。3種類の女性の被り物のうち、チャルシャンバ界隈で一番数が多かったのは、トゥルバンであり、バシュオルトゥスはむしろ少数であった。前出のエミレット紙やヒューリエット紙の言説に従えば、バシュオルトゥスよりトゥルバンの方が、それを着る女性の側に、意識された自己表現の欲求があるということになるから、チャルシャンバ界隈においてトゥルバンを着用する女性が多数であるという事実は、この地区にあっては、イスラームとしてのより強いアイデンティティが女性たちによって表出されていると受け取ることができるだろう。(ただし、トゥルバンとバシュオルトゥスの分類上の差異は、微妙であり、このトゥルバンとバシュオルトゥスの数字上の差は、分類基準が変われば、大きく変動することに留意しておく必要がある。)さらに、そのような傾向を印象づけるもうひとつの特徴として、チャルシャンバ界隈では、被り物を着けない女性はわずか5人に一人と少数派であったことを挙げることができる。

一方、ベシュクタシュ地区では、女性の大半が被り物を着けていなかった。また、被り物を着けている女性のうち、大半がバシュオルトゥスであり、トゥルバンは若干数にとどまった。

これは、おとなの男性や子どもについても、言える傾向であった。チャルシャンバ界隈では、多数派ではないものの、おとなの男性や子どもにお

いても、イスラームを印象づける服装の着用が散見できる。これらは、たとえ数が少なくとも、視覚的な印象という観点から見れば、非常に強い印象を与えるものだといえる。というのも、おとなの女性が被り物を着用している風景は、他地区でも、それなりに見ることができるからである。これに比べて、男性や子どものそれは、ほとんどこのチャルシャンバ特有の要素ということになり、観る者に与える印象はそれだけ強くなるからである。

このように、チャルシャンバ界隈は、服装という観点だけに限定しても、イスラーム的な景観要素があふれている街として、イスタンブルの中でも、特異な位置づけをもっているといえる。これを世俗主義とイスラームが拮抗する今日のトルコという社会にあって、イスラームとしてのアイデンティティを示す可視化された集合的表象の一つの形として捉えることができるだろう。

2. 残された課題

本論では、戦略的に、一旦は「被り物」に宗教的アイデンティティ表象としての意味を操作的に仮託して分析を行った。しかし、分析の過程で明らかになったのは、むしろ「イスラーム的」といわれる服装をめぐる定型化されたカテゴリーをまたぐグレーゾーンに位置する両義的な中間形であり、また、定義から逸脱する多様な変化形であった。とりわけ、女性たちの被り物にそのような傾向は認められた。

ここで重要なのは、それらの中間形や変化形を無理やり「イスラーム的」かどうかという基準で分類することではなく、人々が実際にどのような被り物を、どのように着用しているか、またそれを着用した人々がどのように振舞っているかに視点を移して、あらためて対象を観察しなおすことであると思われる。それは、言い換えれば、より多くの被り物の事例を採集し、そこから概念境界の内外に分布する多様な中間形／変化形の存在を確認することで、背後に見え隠れする複数のコードの存在を抽出することでもあるだろう。

そして、さらにそれは、西欧の側から非対称的に持ち込まれたステロタイプとしての「スカーフ」概念をこえるための作業ともなるに違いない。と同時に、トルコ社会の側において新しく台頭しつつある文化的コード（たとえば、消費社会のコードやフェミニズムのコード）を理解するための新たな枠組みを準備するものともなるだろう。

その作業は、本論文の後、2013年度に引き継がれる本研究プロジェクトの1つの重要な課題となるだろう。

参考文献

Ahmet Hakan, Türban ile başörtüsü arasındaki 12 fark, Dec.5, 2007, *Hürriyet*

萩原正三、石黒いずみ他編『今和次郎採集講義』青幻舎 2011年

今和次郎『考現学入門』ちくま文庫、1987年

Hürel, Haldun. *Anlat İstanbul*, Kapı Yayınları, 2009

Lewis, Bernard. *Istanbul and the Civilization if the Ottoman Empire*. 1, University of Oklahoma Press, 1963.

内藤正典、阪口正二郎編『神の法 vs. 人の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007年

Pamuk, Orhan (forward), *Ara Güler's İstanbul*, Thames & Hudson Ltd., 2009

Parlatır, İsmail (Haz), *Türkçe Sözlük1,2*, 9. Baskı, Türk Tarih Kurumu Basım Evi, Ankara, 1998.

山中速人「コリアタウン（大阪市生野区）の映像記録の方法と実際:防振ステディカムを使用したフィールドワークの試み」『日本都市社会学会年報 29』2011年9月、pp.25-37

Yüzbaşıoğlu, Nil (ed.), *İstanbul Hakkında Her Şey*, Boyut Yayıncılık A. Ş., 2010